

二〇二四年度

一般入試① 問題(国語)

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二二ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督かんとくに知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ホテルマンである「俺」は、ホテルの筆耕士（宴会場で行われるパーティーや披露宴の招待状の宛名書きなどをする仕事）を長年務めてきた遠田康春が亡くなり、新たにその跡を継いだ書家遠田薫の書道教室を、あいさつと仕事の依頼を兼ねて訪れた。

「遠田薫さん？」

床の間のほうへと長机のあいだを進む男の背に、俺は遠慮がちに呼びかけた。

「あん？」

とちよつと振り返った男は、生徒が筆を走らせている半紙が目の端に映ったようで、

「うおーい、へのへのもへじ書いてるんじゃないやねえ」

と三年生ぐらいの男の子の頭をぐしゃぐしゃ撫でた。

「バレた」

と男の子は笑う。「若先、戻ってくんの早いよ」

わかせんというのは、若先生の略だろう。この男が遠田薫だったか。女にモテそうなうえに書の腕前も達者なのか。しかも生徒にも慕われている様子だ。容姿や才能の配分に不公平が生じているのではないか、と内心で天への恨み言をつぶやいていたら、

「ねえねえ、そのひとだあれ？」

と教室後方から女の子の声が出た。これまた小学校中学年ぐらい、もう一人の同じ年ごろの女の子と並ぶ形で、庭がわの長机を一緒に使っている。二人は俺を見てくすくす笑った。職場でも子どものお客さまと言葉を交わす機会はさほどないの
で、どう応答したらいいかわからない。とりあえず軽く頭を下げたら、女の子たちのくすくすが激しくなった。ふいの
入者にテンションが上がっているのだろうとは思ったが、困惑した。

「夏休み初日で、こいつら気もそぞろなんだよ」

と遠田は言い、文机ふづくえに向かつてどつかと腰こしを下ろした。生徒たちに俺おれを紹介しょうかいする気はないらしい。突つつ立たつていてもしょうがないので、俺おれも遠慮えんりょがちに遠田のかたわらに正座せいざした。

「おら、ちゃっちゃと書け。書いてとつとどつか遊びにいつてくれ」

「だつてさあ、バランス取るのむずかしいよ」

「若先がなかなか花丸はなまるくれないじゃん」

子どもたちが口々に文句を言い、

「手本書いてやっただろうが。適当になぞれや」

と遠田が応戦する。

3 書道教室とはこんなににぎやかでいいかげんなものなのだろうか。驚おどろいて推移を見守っていると、子どもたちはひとしきり騒さわいだことで気がすんだのか、勝手に集中力を取り戻して半紙に向かいはじめた。そのあいだ遠田はといえば、梵天ぼんてんの耳かきで耳掃除みみぞうじをしていた。生徒の自主性に任せると言えば聞こえはいいが、いつもこの調子で指導なごろくすつぼしていないのではと疑念が湧わいた。筆とともに自身の硯すずりの横に置いてあつた耳かきを、遠田が視線もやらず迷いなく手に取つたからだ。こんな男が書道教室の跡継ぎとは、草葉の陰かげで康春氏が泣いていそうだ。

俺の疑念と非難の眼差しを察知したのだろうか。耳掃除を終えた遠田は、耳垢みみあかを落とした半紙を丸め、文机のそばにあつた屑籠くずかごにぱいと捨てると、立ちあがつて教室内をまわりはじめた。生徒たちの手もとを覗のぞきこみ、ときに筆を持つ手に手を添そえてやつて、「だいたいこんな感じ」と筆づかいを伝授する。

ようやく俺が思い浮かべていた書道教室のありさまに近くなつてきた。

座すつたままのびあがつて観察したところ、子どもたちはみんな「風」と書いているようだ。たしかに、バランスを取るのがむずかしそうな気がする。生徒のなかには一年生ではと思おもひしき小柄こがらな男の子も一人いて、あの子は書道うんぬん云々以前に、「風」という漢字をまだ習っていないのではと気が採とめたが、遠田はそんなことにはおかまいなしだ。

「ほい、手首ぶらん。そうそう。リラックスしたまま筆先に気持ちを集中させて、『いまだ！』つてときに半紙に下ろせ」

「『いまだ！』つていつっ」

と、小柄な男の子が中空で手首を揺らしながら尋ねた。

「筆をちんこにたとえると、『もうしょんべん漏れそう！』ってぐらい気合いが充満したときだ」
「バカじゃん、若先」

小柄な男の子はあきれたような眼差しを遠田に向け、

「あたしたちそんなもんじゃないけど」

と後方の長机から女の子たちも抗議の声を上げた。

「不完全なたとえをして悪かった。筆を膀胱だと思ってほしい」

「ポウコウってなに？」

「そうか、おまえらおしっこ我慢しないから、存在に気づいてないんだな。体んなかにある、しょんべん溜まるところだよ」

「ほんとバカじゃないの、若先」

教室のあちこちでブーイングが起きる。

4
まったく同感だ。書への冒瀆ぼうとくもはなはだしい。五分も経たず前言撤回てんげんてっかいしたくはないが、俺が思い浮かべて書いていた書道教室のありさまでは全然ない。

遠田はブーイングを気にする様子もなく、ひととおり生徒たちの「風」を見てまわり、

「なにかがたりないっていうか、堅かたいんだよなあ」

と敷居しきいをまたいで仁王立におうたてちした。「いったいどういう『風』を思い浮かべて書いてんだ？」

5
「どういうって……」

「風は風だよ」

教室のあちこちで困惑の囁ささやきが交わされる。

「漠然ぼくぜんと書いているから、面白味おもしろみがねえんだよ」

と遠田は断じた。「いつも言ってるだろ。手本なんか参考程度にしときゃいい。大事なのは文字の奥おくにあるもんを想像す

ることだ。『朝顔』つて書くことになったら、『どんな色の花を咲かせる朝顔かな。もしかしたら小便用の便器かも』つて、文字を通して自分が伝えたいことはなにかを考えてみるんだ」

「よくわかんないけど、おしっこから離れてよ」

女の子のうちの一人が顔をしかめ、

「すまん」

と素直に謝った遠田は、なにを思ったか六畳間と八畳間の掃きだし窓をすべて開け放った。

熱と乾いて埃っぽい庭土の香りがドツと室内になだれこむ。

「暑いー！」

「熱中症になったらどうすんの」

生徒たちは悲鳴を上げたが、人工の冷気が夏の威力にかき乱され、薄まっていくのを体感し、どこかはしゃいでいるようでもあった。

「ほら、これが夏の風だ」

遠田がそう宣言するのを見はからつたように、暑気を切り裂いて一陣の風が吹き抜け、庭の桜の葉を、そして生徒たちの手もとの半紙を、さわさわと揺らした。

「どんな風だった？」

窓を閉めながら遠田が尋ねると、

「ぬるかった」

「そうかな、けっこう涼しかったよ」

と生徒たちは口々に答える。

「じゃ、いま感じたことを思い浮かべながら、もう一度『風』つて書いてみな」

遠田は再び文机に向かって腰を下ろした。「⁶そういう習慣をつけときゃ、そのうち真夏にも冬の『風』を書けるようになる」

エアコンが「一からやりなおしだ」とばかりにゴウゴウと音を立てる。でも生徒たちは気を取られることなく、また涼しくなっていく部屋のなかで真剣に半紙に向きあい、それぞれの夏の「風」を書きはじめた。

納得のいく書を書きあげたものが、つきつきと遠田に見せにくる。最終的には生徒全員が文機のまわりに集結した。

遠田は一人一人の書を丁寧^{ていねい}に眺め^{なが}、

「うん、軽やかでいい感じの風が吹いてる。この『虫』みたいな部分の角つちよは、つきからもう少し筆を立てて書くようにしたほうがいいかもな」

「夏の蒸し暑さがよく出てるじゃねえか。だが、そこを重視しすぎて、二画目のハネがちよつともたついちまったな。ま、滞留^{たいりゅう}する風もたまにはあるってことで、よしとするか」

などと感想を述べつつ、各人の書に朱墨^{しゆもく}で大きく花丸を描いて返した。正座した生徒たちは、自分以外の書の講評にも耳を傾け、遠田の言葉にうなずいたり笑ったりする。

素人の俺の目にも、窓からの風を感じたあとの生徒たちの字は生き生きと躍動^{やくどう}して見えた。もちろん、生徒たちの長机にある、遠田が手本として書いた「風」とはレベルがまるでちがう。遠田の手本は、夏の風のような猛々^{たげげ}しさを秘めながらも、いわゆる「習字のお手本的なうまい字」だった。それに対して生徒たちの「風」は、いびつだったりたどしかりする。

でも遠田は、手本に無理に近づけるためのアドバイスはしなかった。⁸俺もいつしか文机ににじり寄って、生徒たちが遠田に差し出す半紙に夢中で見入った。それぞれが感じた夏の風が、思い思いの形で文字にこめられていた。まわりつくような「風」。清涼^{せいりやう}でホッと一息つける「風」。やっぱりエアコンの利いた部屋のほうがいいなという「風」。

俺は感心した。なるほど、「風」という一文字だけでも、こんなに多種多様で自由なものだったのか。書道とはこんなにのびのびと気楽に取り組めるものなのか。なにより、遠田に書を褒められ、改善点を教えてもらう子どもたちの、誇らしげで楽しそうな表情といたらどうだ。

たとえば指導法に少々下品だったり型破りではと思われるところはあるが、遠田は書道教室の先生として、やはり逸材^{いつざい}なのだろうと察せられた。書家としてのレベルは、俺にはよくわからない。ただ、手本の文字が力強く端整^{たんせい}で、目を惹かれる

ものなのはたしかだ。

へのへのもへじを書いていた男の子の「風」は、あらゆる線がなんだか震えていた。

「こりゃあ……」

と遠田は言った。「おまえもしかして、吹く『風』じゃなく、引く『カゼ』を思い浮かべながら書いたんじゃないか」「すげえ！　なんでわかったの若先！」

へのへのもへじの男の子は手を叩いて喜び、まわりの子たちは「そのカゼじゃないよ！」と口々に叫んで笑い転げた。小学生の笑いのツボがわからなかったが、それはともかく、なぜ遠田がカゼだと見抜いたのか、俺も知りたい。

「やっぱりな。悪寒って感じがする」

と遠田は言った。

「オカンってなに？」

「ママのこと？」

「『ママ』って呼んでんのかよ、だっせえ」

「じゃあなんて呼ぶの」

「『母ちゃん』だろ」

「嘘だあ。あんたが『ママ』って呼んでるの見たことあんだからね」

子どもたちの会話はどんどん脱線していったが、遠田はいたってマイペースで、震える「風」にもゆったりと花丸を描いたのち、

「カゼ引いたとき、熱が高いのに寒くてぶるぶるすんだろ。あれが悪寒だ」

と律儀に説明した。「俺がすごいんじゃない、悪寒つばさを伝えてきたおまえの字がすごいんだよ。その調子で、今度から『風』の一字には吹く風の意味をこめろ。いきなり反則技かましてくんじゃねえ」

「はい」

へのへのもへじの男の子は照れ笑いしたが、いたずらが成功してうれしそうでもあった。

全員の書を確認し終えた遠田は、

「よっしゃ、また来週な。気をつけて帰れや」

と立ちあがった。生徒たちは、

「ありがとうございます」

と正座したままきちんと礼をし、半紙をばたばた振って墨を乾かしながら長机に散った。帰り仕度じたくができたものから、^⑩三々五々、教室を出ていく。

(三浦しをん『墨のゆらめき』)

⑩ 闖入者：突然入ってきた者。

三々五々：少しずつまとまって行動するさま。

問一 ——線部1「二人は俺を見てくすくす笑った」とあるが、この時の女の子たちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どぎまぎしている「俺」の様子がおかしくてたまらず、笑ってはいけないと思いつつもおさえられないでいる。

イ 見慣れない「俺」が突然現れたことに興味がわいてきて気持ちがあたふたかぶり、思わず笑いが出てしまっている。

ウ 何の紹介もあいさつもなく入ってきた「俺」に反感を持ち、あざけるような笑い方でその気持ちを表現している。

エ 急に現れた「俺」のことが気になり、書道に気が乗らないこともあって、笑いかけて注意をひこうとしている。

問二 —— 線部2「遠慮がちに遠田のかたわらに正座した」とあるが、この時の「俺」はどう思っているか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分を好奇の目で見てくる生徒たちに早く素性を明かしたいのだが、自分に対して自信がない上に、紹介される前にこちらから声をかけるわけにもいかなないので、なるべく目立たないようにしようと思っている。

イ 教室の様子をすぐにも見たいのだが、遠田と会ったばかりで緊張していることに加え、遠田からも生徒たちからも突然の訪問を歓迎されていないように感じられ、このまま居続けていいの不安に思っている。

ウ 生徒たちに関心を持たれていることは感じ取りつつも、子どもとの接し方に慣れていない上に、まだ自分がどういう用事で来たのかがわかってもらえていないこともあって堂々とふるまえず、気まずく思っている。

エ 遠田の教室でのふるまいを早く確認したくて仕方がないものの、生徒たちの不真面目な様子に困惑したことに加え、来たばかりで教室の雰囲気^{かんいき}が十分につかみきれていないので、まずは様子を見ようと思っている。

問三 —— 線部3「書道教室とはこんなにぎやかでいいかげんなものだろうか」とあるが、「俺」はどのような様子を見てこのように思ったのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア おしゃべりをしながらも書くことには常に熱心な生徒たちが、やる気の感じられない指導者に対して、さほど違和感を持つこともなく、口では文句を言いながらも慕っているように見える様子。

イ 失礼な言動を繰り返す生徒たちを指導者が注意せず、大人に対する礼儀を教えないばかりか、生徒の取り組みに関心すら持つておらず、基本的な指導をおろそかにしているように感じられる様子。

ウ 生徒たちが真剣に書道に取り組もうとしないばかりか、指導者もそれを気にとめず、常識とかけ離れた指導ばかりすること、自分の並外れた才能を見せつけているように感じられる様子。

エ 生徒たちが書くことに集中せずに余計なことばかりしている上に、指導者もそれを正そうとせず、書についての指導も粗^{あら}っぽく雑なものであるため、軽くあしらっているように見える様子。

問四 — 線部4「書への冒瀆もはなはだしい」とあるが、「俺」は遠田のどのような点について「冒瀆」だと感じているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。なお、「冒瀆」という言葉は「神聖なものをけがすこと」を意味する。

ア はしたない言葉を意味もなく連発し、書道の格式の高さを教えようとしめない点。

イ 道具や書くときの心構えを、ことさらに品のない言葉でたとえて悪びれもしない点。

ウ 書を軽んじる思いを隠そうともせず、不適切な言葉ばかりを口にしてしている点。

エ 静かに書に集中すべき場なのに、生徒が汚きたない言葉で悪態をつくの容認している点。

問五 — 線部5「風は風だよ」とあるが、この言葉から、遠田の言葉に対する生徒たちのどのような反応が読み取れるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「どういう『風』」と言われても、初めから遠田の言うことなどまじめに聞く気持ちはなく、どうでもいいこととしてみんなで知らない振りを決めこんでいる。

イ 「どういう『風』」と言われても、風は風に決まっているのではないかと思い、わけのわからないことばかり言う遠田のことを困った人だという目で見ている。

ウ 「どういう『風』」と言われても、同じ吹く風にもいろいろな風があるのだということには気づけず、何を聞かれていてどう答えたらよいかわからずにいる。

エ 「どういう『風』」と言われても、風は目に見えないので、形として思い浮かべることができず、どう字に表したらよいかもわからなくてとまどっている。

問六 ——線部6「そういう習慣をつけときゃ、そのうち真夏にも冬の『風』を書けるようになる」とあるが、どういうことを言おうとしているのか。「そういう習慣」とはどのような習慣であるかが明確になるように、次の書き出しに続けて、六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。

文字を書くときに

問七 ——線部7「生徒たちは気を取られることなく、――真剣に半紙に向きあい」とあるが、ここには生徒たちのどのような様子が表れているか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア これまでは季節による風の^{ちが}違いに注意を向けたことがなかったが、夏の風を自分の肌で感じたことよって、他の季節の風との違いを文字で書き表す意欲がわいてきて、これまでにない程のやる気を見せている。

イ これまでは自分の中にある思いをうまく形にできなかったが、夏の風を受けたことよって、自分の表現したいことが明確になり、その思いを忘れないうちに書こうという強い気持ちのみなぎらせている。

ウ これまでは特に何かを考えることもなく文字を書いていただけだったが、不意に遠田に窓を開けられたことよって、仕切り直しをしようという気分になり、本気で書に取り組もうと決意を新たにしている。

エ これまではただ半紙に文字を書くだけだったが、実際に夏の風を感じたことで、その体験にもとづいたそれぞれの夏の風を文字で表現しようと意気^ごむようになり、周囲をかえりみない程に集中している。

問八 —— 線部 8 「俺もいつしか文机ににじり寄って、生徒たちが遠田に差しだす半紙に夢中で見入った」とあるが、この時の「俺」の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア これまで自分には適切だと思えなかった遠田の指導を受け、その前よりも明らかに良くなったように見える生徒たちの作品に、いつのまにか関心を引き付けられている。

イ 指導法には疑問を感じてしまう遠田の手本から、生徒たちは何かを吸収することができたのかどうか、作品を見て確かめてみたいという気持ちが生まれている。

ウ 遠田の指導にはやや型破りな印象があるものの、先ほどよりはずっと手本に近づいてきた生徒たちの作品を次々と目の当たりにして、いつしか心を奪^{うば}われている。

エ 独りよがりなところの目立つ遠田の指導から、どうにかして何かを学ぼうとする生徒たちの熱意にふれ、どれほど上達したのか自分の目で確かめたいと思っている。

問九 —— 線部 9 「やはり逸材なのだろうと察せられた」とあるが、なぜ「俺」はそう思うのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 書道の奥深さを力強く端整な手本の文字を通じて子どもたちに伝え、子どもたちもまた遠田の手本にあこがれを持ち、少しでも近づこうと努力しているから。

イ 書道は気楽に取り組めば十分であるということを子どもたちに伝え、子どもたちもまた遠田の言葉に従って、上達することを目指さずに楽しんでいるから。

ウ 書道は自分なりの表現を追求しなければならぬことを子どもたちに伝え、子どもたちもまた遠田の助言を受けて、自分の個性を見つけ出そうとしているから。

エ 書道の楽しさや自分なりに表現することの大事さを子どもたちに伝え、子どもたちもまた遠田のそうした指導を受け止めて、実に生き生きとしているから。

問十 ——線部 10「震える『風』にもゆったりと花丸を描いた」とあるが、この時の遠田の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 吹く「風」ではなくわざと病気のカゼを思い浮かべたのは良くないが、それを自分なりに実感をこめて表現できていることは認めてあげたいと思っっている。

イ 吹く「風」ではなく病気のカゼによる悪寒をいたずら心から思い浮かべているのは問題だが、あえて褒めることで手なずけてしまった方が良く感じている。

ウ 吹く「風」ではなく病気のカゼによる悪寒を思い浮かべて書いた子の字の方が、他の子たちの文字と比べてもはるかに出来ばえが良く、ひそかに感心している。

エ 吹く「風」ではなく病気のカゼを思い浮かべたために、「風」の字のあらゆる線が震えてしまつて出来ばえは良くないが、それも大目に見ようと考えている。

問十一 ——線部 11「へのへのもへじの男の子は照れ笑いしたが、いたずらが成功してうれしそうでもあった」とあるが、この時の男の子の気持ちはどのようなものか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア わざと指示に背いた自分の字が褒められて、あまりに幼稚なことを恥ずかしくも思いつつ、いたずらを受け止めてくれてありがたいと思っっている。

イ 自分なりに気持ちをこめて書いた字の出来ばえを褒められて、どこか照れくさくもありつつ、あえて遠田の言うとおりにしなかった意図が伝わりうれしく思っっている。

ウ 思い浮かべたことが伝わる字であることを褒められて、どこかすぐぐたい気持ちもありつつ、自分の遊び心に遠田が気づいてくれたことに喜びを感じている。

エ 遠田に自分の字の意図していなかった点について褒められて、きまりが悪いという思いもありつつ、悪ふざけの内容が遠田に伝わったことには面白さを感じている。

問三 ——線部12「正座したままきちんと礼をし」とあるが、生徒たちのこの様子からどのようなことがわかるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア バカなことや下品なことを言う遠田に対して、生徒の方が大人で、節度をわきまえ礼儀正しくふるまうことを当然だと思っていること。

イ 書道教室の生徒たちは、いいかげんなどころもあるし品のないことも言う遠田に、親しみだけではなく敬意をもって接していること。

ウ いいかげんに見える遠田も実はしつづけには厳しく、書道教室の生徒たちは、遠田に叱しかられないように緊張感をもって過ごしていること。

エ 書を書き上げた生徒たちは、一刻も早く遠田の許しを得てすぐにも遊びに行けるように、行儀よくあいさつをしようとしていること。

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(熟達を探求していく) プロセスには普遍的な要素がある。だから別の領域で探求してきた人と話をする時、同じ学びの話をしてるように感じられることがある。

将棋の羽生善治さんとお話をした時に「すべての手を考えるのではなく、考えるべき手が二つ三つほど浮かんできてその手をケントウします。それらは直感で上がってきます」とおっしゃっていた。競技者が没頭している時に、考えるより勘で決めた方が早く論理的な結果を生む状態と同じだ。

また映画監督の北野武さんは「いい役者は自分から見たカメラと監督から見たカメラの二つを持つてる。その次にいい役者は自分のカメラだけのやつだ。一番ダメな役者は中途半端に監督から見たカメラを意識しているやつだ」とおっしゃっていた。スポーツで言えば、無意識で行っていた選手が客観的になり、考え始めた時にスランプにハマる「考え始めの谷」と同じである。

具体的な技能が領域を跨ぐことは少ない。ハードルがうまく跳べても、料理がうまく作れるとは限らないし、マネジメントがうまくできるとも限らない。しかし、ある世界で技能の探求を通じて得た「学びのパターン」は他の世界でも応用可能だと私は考えている。

昨今、人間の能力に関して知見が蓄積されていく中で、努力の価値が疑われつつある。人間の行先は遺伝子と環境要因によって決まっているという意見もあり、そうであれば努力は意味をなさない。

人間についての謎が解明されるにつれ、人間の可能性を信じるのが難しくなった。可能性とは、別の言い方をすれば、振れ幅のことである。「可能性がある」とは「未来はどうなるかわからない」ということだ。だからあらゆることはつきりするならば可能性はなくなっていく。

また人間の卓越した技能を機械が再現できないことが、人間の神秘性を支える一つの理由だったが、少しずつ人間の技能が勝てる領域は小さくなってきた。実際に、複雑性が高いため、当面は人間を超えるのは難しいだろうと言われた囲碁の世

界でも人工知能に人間が敗れた。身体操作は複雑だから、歩行ひとつとっても機械は満足にできないと言われていたが、自由になる四足ロボットが登場し、二足走行も数年前と比べかなりスムーズになっている。身体操作の領域でもいずれ追い越されるのだろう。

ひとつの技能を極めていくことは、目的とされるものに最適化することでもある。例えば仕事とは何かの機能を果たすこととであり、良い仕事をするには仕事の役割に自らを最適化することが求められる。ネジを締める時に、ドライバーを使うのが最も効率が良いように、いつも安定して質の高いパフォーマンスがハッキリできることが良いこととされてきた。だが、その最適化だけを求める技能は機械にとって換わられつつある。

どの分野でも問われ始めたのは、人間にしかできないことは何か、だ。合理性を追求してきたのは私たち自身なので皮肉ではあるが、機械にやらせるのが最も合理的であるとしたら人間は何をやるべきなのだろうか。新しい技術に対して投げかけられる「何の役に立つのか」という問いはこちらに投げ返された。人間の存在意義とはなんだろうか、という問いだ。

私は熟達こそが「人間にしかできないこと」を理解する鍵になると考えている。機械と人間の最大の違いは「主観的体験」の有無だ。私たちは身体を通じて外界を知覚し、それを元に考え行動している。思考し行動する部分はいずれ機械が行えるようになるかもしれないが、知覚は身体なしでは行えない。本書では身体の例を多用している。私自身のバックグラウンドがアスリートであることも影響しているが、人間と機械を分ける決定的な差だと考えるからでもある。自分の身体で外界と内部の変化も感じ取り、試行錯誤しながら上達し、上達している自分を内観する。この一連のプロセスから得る「主観的体験」こそが人間にしかできないことではないか。

熟達していく過程で、私たちは夢中という状態に入る。この状態では外界の感じ取り方も変容し、リアリティがイッソウ高まる。熟達のプロセスで遭遇する夢中の瞬間こそが人間の生きる実感の中心だと私は考えている。それは他ならぬ「私」を通して、世界を感じていくプロセスでもある。考える私より、感じて動く私に「人間にしかできないこと」が潜んでいるのではないか。

この夢中に連なる熟達の道だが、そこには孤独がどうしても付きまとう。技能が向上していけばオリジナルを追求せざる

を得なくなるから仕方がないことかもしれない。

私たちは社会で生まれ、育っていく。個としては弱い私たち人類の生存戦略は、群れで力を合わせて生きていくことだった。他の動物と比較して未熟な子供の期間が圧倒的に長い人間は、その時間を使って社会という群れの中で生きていく能力を育む。孤立したまま成長すれば、生き抜くことすら難しいだろう。

5 群れに適応している我々は孤独に弱い。他者に認められたいとネガうことも、他者を喜ばせたいと思うことも、仲間はずれにされてキズつくことも、群れに属していることで起きる。群れの中では、集団内での評判が自らの生存と遺伝子を残すことに影響しているからだろう。

孤独感を和らげるわかりやすい方法は、集団に受け入れられることだ。どこかに所属し、なんらかの役割を見出すことで私たちは安心する。だが、辛いのは、何かを極めても、他者に認められるとは限らない。

6 そもそも正当な評価などない。勝ち負けがはつきりしているスポーツのような世界は、まだ評価しやすい。だが、世の中の多くの領域は何を基準にするかがとても難しい。評価基準が時代と共に変わってしまうこともよくあるだろう。

他者が正しいかもしれないし、自分が正しいかもしれない。多くの人に評価されたとしてもそれが正しいのかどうかもわからない。皆が散々に否定したのに評価がひっくり返ったことは、歴史上山ほどある。結局何が正しいのか答えは出ない。

7 他者の承認が欲しくても、それを直接追いかけると翻弄されてしまう。追いかけているうちに自分のやり方が正しいのかどうかわからなくなってくる。初心者の段階ではわかりやすいが、段階を経るとこうすればいいという方法はなくなり、自分に合ったやり方を選ぶしかなくなる。正しいことをやったからうまくいくわけでもなく、うまくいったから正しいわけでもない。たまたま最初がうまくいかなかっただけに、反省して正しいやり方を諦めてしまうかもしれない。たまたま一度うまくいったやり方を正しいと思込んで、間違えたやり方に固執してしまうかもしれない。結果だけで、いい決定だったとか悪い決定だったと世間からの評価が下る。何一つ正解がなく誰も教えてくれない中で、この方向だと自分で見当をつけて進んでいかなければならない。

結局、その時に尋ねる相手は自分自身しかない。

外部に答えを求めるならば、孤独は辛いものとなる。だが、孤独でなければ得られないものもある。人間は社会性を持つ生き物で、かならず周囲の影響を受ける。人間は他者に同調することを避けられないのだ。オリンピックの決勝のような舞台ですら、トップスプリンター同士の足の回転のリズムがシンクロすることが知られている。リズムだけではなく、相手の動きや、話し方、考え方にも影響される。集団にいと、どんなに意識しても集団に自分がすり寄っていくことになる。当然、常識とされるものも似通っていくのだ。

孤独であれば、集団に対しての同調から距離を取るができる。集団の「当たり前」に影響されにくくなるのだ。「当たり前」に影響を受けるからこそ私たちは逸脱した行為をせず円滑に社会を回していられるが、裏を返せば集団に同調することで、他との差異がなくなっていくとも言える。集団と折り合っているならば、少なからず集団の中央値に寄っているはずなのだ。孤独は人をオリジナルな存在にする。一人の人間が独創的なアイデアを孤独の時間に生み出した例は、歴史上たくさんある。孤独だからこそ、今までにない何かが生まれたのだ。

他者といえる時、私たちの注意は他者に向かう。誰かと一緒にいるということは、そこに注意が向かうということだ。人間の意識は、外に向かっている間は内側には向かない。寂しさはなくなるかもしれないが、自分と向き合うことはできない。自分を知るためには、他者との関わりを断つ時間が必要だ。自分自身を理解し、自分の見方の癖に気がつくには自分の内側を向ける必要がある。とても行動的で社交的なのに、自分のことを驚くほどわかっていない人がいる。それは外的世界を理解すること、自分の内側を理解することが根本的に違うからだ。

孤独の時間は今まで気づかなかったことを浮かび上がらせる。何かに対し面白いと感じる時、なぜ自分はそれを面白いと思ったのだろうかという問いかけを行うこともできる。風が吹いて心地よいと感じる自分を観察することもできる。だが、外に注意を向けていけば、自分が感じていることに気づかない。熟達の道をいくと、孤独が怖くなくなっていく。それは夢中になる喜びがあるからだ。人は夢中になると、他者からどの程度離れているかを忘れていく。逆説的だが孤独を恐れず集中していくことで孤独感は和らぐ。夢中になっている時間は孤独を認識する自我すらなくなるからだ。

問一 〜〜線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1 「別の領域で探求してきた人と話をする時、同じ学びの話をしているように感じられることがある」とあるが、「同じ学びの話」と感じられるのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア ある世界で確かな技能を身につけた人の考えは、成功したという点で他の領域の成功者の考えと似てくるものだから。
- イ ある領域で自分ならではの認識を深めた人の考えは、ある程度の工夫を加えれば違う世界でも使えそうであるから。
- ウ 一つの世界で高みを追求してその大事な部分をつかめた人の考えは、他の世界にも当てはめて生かせるものであるから。
- エ 一つの領域で何かをつかみとれた人の考えは、違う分野においてもそのまま使い回せることが時にはあるものだから。

問三 ——線部 2 「振れ幅」とあるが、ここでいう「振れ幅」とはどういうことを表した言葉か。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 遺伝子と環境要因の違いによって決まってしまう人それぞれの能力の差。
- イ 人工知能の発達で無限の可能性を持つようになった機械と人間の技能の差。
- ウ 同じように努力をしたとしても、個々の人によって変わってくる結果の違い。
- エ その人の努力によって変わってくる、人間が将来的に生み出せる成果の違い。

問四 — 線部 3 「皮肉ではあるが」とあるが、どのような点が「皮肉」なのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 機械よりも優^{すぐ}れていたはずの人間が作業効率を求めた結果、機械に任せて人間は手出ししない方がよいという考えに行き着いた点。

イ 合理的なものを追求すればするほど、あらゆる面で人間よりも機械の方がまさっているということが明らかになってしまった点。

ウ 様々な分野で質の高い仕事をするために、人間にしかできないことよりも機械だからこそできることが優先されるようになった点。

エ これまで人間が機械をうまく使いこなしてきたが、今後は機械が行う作業を人間が手助けするという形になりかねなくなった点。

問五 — 線部 4 「考える私より、感じて動く私に『人間にしかできないこと』が潜んでいる」とあるが、なぜそのように言えるのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 単に思考し行動することは機械にもできるが、夢中になって身体を動かすことで世界を多様なものに変化させるのは、人間であるからこそ可能なことだから。

イ 人間は身体を使って世界を感じ取るが、自分自身の感覚をたよりにしながら何かに夢中になっていくという過程は、機械には起こり得ないものだから。

ウ 人間が身体的な経験を通して物事に夢中になり、リアリティを持って世界を感じ取ることは、機械が世界を大づかみにとらえることとは決定的に異なるから。

エ 機械は思考を通して世界を感じ取るが、人間は自分の身体で何かを感じ取ったり夢中になったりするのであり、こそが人間にしかできないことだから。

問六 —— 線部5「群れに適應している我々は孤独に弱い」とあるが、なぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間は他の動物と比較して未熟な子供の期間が圧倒的に長く、その期間中に、孤立してはとうてい生きてはいけけないのだということを植え付けられてしまうから。

イ 人間には他者に認められたい、他者を喜ばせたいという思いがあり、仲間はずれにされれば辛い思いをするように、生まれつき孤立を恐れる性質を持っているから。

ウ 人間は、個としては弱く、集団として協力しなければ生き抜くことが難しいので、集団内での評判を気にかけて孤立しないように生きていこうとするものだから。

エ 人間は社会性を持つ生き物で、集団の中にいると必ず周囲の影響を受けてしまうので、孤立してでも自分独自の道を追求して生きていくような生き方が難しいから。

問七 —— 線部6「何かを極めても、他者に認められるとは限らない」とあるが、そうなるのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 本質をつかんだという自分の中の手ごたえは信用できるのに対し、正しさをめぐる他者の評価がひっくり返ったことは歴史上多くあり、そちらは信用ならないものではないから。

イ 何かを評価する時には、他者と自分のどちらが正しいのか決定できないために、自分としてはそのものの本質をつかんだつもりでも、それが実は見せかけにすぎない場合もあるから。

ウ 評価の基準というものは勝ち負けがつく世界以外はいまいであり、本質をつかんだと思う自分もそれを批評する他者も、それぞれの基準を振りかざして評価しているだけだから。

エ 評価するための基準がいまいだったり時代によって変化したりするために、自分としてはそのものの本質をつかんだつもりでも、他者が理解してくれない可能性があるから。

問八 — 線部7「他者の承認が欲しくても、それを直接追いかけると翻弄されてしまう」とあるが、その結果どうなってしまうと筆者は述べているか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 世間の評価を正しさの判断基準にするために、わかりやすい成果が出るかどうかということしか考えられなくなり、そこに至るまでの過程を大事にしなくなってしまう。

イ 世間からの評価を気にするために、一時的な評判の良し悪しに振り回されることになり、自分が本当に適切な方法を選べているのかが判断できなくなってしまう。

ウ 世間から評価されることを重視するために、誰もが認める方法と自分なりの方法との間でどっちつかずになり、自分なりの方法が大事だということを忘れてしまう。

エ 世間で評価されている方法を探そうとするために、他者から過度に影響を受けるようになり、自分なりのやり方を考える必要が出てきてもうまく選べなくなってしまう。

問九 — 線部8「とても行動的で社交的なのに、自分のことを驚くほどわかっていない人がいる」とあるが、「自分のことを驚くほどわかっていない」状態が生まれるのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 他者に関心を持ち、他者について多くのことを知っている人であっても、自分に注意を向けることがその分おろそかになってしまい、自分自身を十分理解できていない場合があるから。

イ 他者のことに関しては詳しくて常に注意と関心を向けることをおこなわない人であっても、自分自身に関しては興味を持たずに、まったく我が身をかえりみようとしない場合があるから。

ウ 他者に働きかけて自分のペースに巻きこむことが得意な人であっても、他者の気持ちを受け止め期待にこたえるのに必死で、自分の本当に求めているものを見失ってしまう場合があるから。

エ 他者に強い関心を持ち、他者を理解することには優れている人であっても、自分のことを理解するのはそれとはまた別の能力であり、その能力に関して言えば欠けている場合があるから。

問十 ——線部9「逆説的だが孤独を恐れず集中していくことで孤独感は和らぐ」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 他者への同調から距離を取り、むしろ夢中になることで自分自身をオリジナルな存在へと高めていく喜びを感じることでできれば、結果として孤独であることを楽しめるようになるということ。

イ 他者との関わり方にはかり注意を向けるのではなく、自分が面白いと思うものに対して意識を集中することで、結果的には自分が孤独な状況に陥おちつていくことにすら気がつかなくなるということ。

ウ 孤独を避けて周囲の人々に合わせようとするよりも、自分にしかできないような独創的なやり方を追求していった方が、かえって高い評価を得ることができて孤独からも解放されるということ。

エ 孤独を恐れて他者に同調していくのではなく、むしろ自分自身がこの世界を感じ取る過程を大切にし、その喜びに没頭することで、結果的には孤独を感じることをすらなくなるということ。

問十一 ——線部「そこには孤独がどうしても付きまとう」とあるが、「熟達の道」を進んでいくと、なぜ「孤独」が付きまとうのか。次の書き出しに続けて、六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。

集団の中で人間は

ただし、次の二語を必ず使うこと。

同調 オリジナル

二〇二四年度 一般入試① 国語解答用紙(1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2
--	-------

合計

一

問一
問二
問三

問四
問五

問 六				文字を書くとき
80	60			

問七	問十
問八	問十一
問九	問十二

二〇二四年度 一般入試① 国語解答用紙(2)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問一	
d	a
e	b
	c

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問 士				集団の中で人間は
80	60			